

それに対して僕はあまりにも無力だった  
決して抗えない巨大な力の前では  
僕はあまりにも無力だった

『孤独の発明』

第一稿

・登場人物

- 吉川昇平 (2 1)      ↳ 『孤独の発明』の被験者、孤独の祭典を姉と見ていた
- 野中史 (2 2)      ↳ 『孤独の発明』の被験者、両親をなくしひとりぼっち
- 篠ノ井 (4 5)      ↳ 市役所の職員、昇平と史を担当する
- 石田理沙 (2 1)      ↳ 昇平と同じ大学に通う
- 佐野              ↳ 市役所の職員、二人の写真を毎朝取りに来ている
- 橋本              ↳ 『孤独』を発明した学者
- 今野              ↳ 地元で暮らす昇平の同級生

- 吉川千明              ↳ 昇平の姉(十年前)
- 木村聡美              ↳ 『孤独』の真相を究明しているフリーライター
- 坊主                ↳ 昇平の姉の墓がある寺の住職
- 若坊主              ↳ 坊主の跡取り息子
- 子供                ↳ 史の子供
- 病んだ女              ↳ 橋本のカウンセリングを受ける
- 逃げた男              ↳ 史から逃げた男
- 男の女              ↳ 男の女
- 編集長              ↳ 出版社に勤める週刊誌の編集長

少年の昇平

少女の史

史の父

史の母

・物語概要

「ようやくこの街にも孤独の発明を検討する動きが起きました」

ブラウン管の中でニュースキャスターがそう言った。

「果たしてこの街が孤独に耐えうるものなのか、市議会では連日連夜の会議が行われ、つきましてはこの度、孤独の体験に協力してくれる方を募集します」

孤独の被験者として選ばれた吉川昇平と野中史は3ヶ月間の同棲生活を要求される。

孤独とは一体何なのか？二人はその答えがわからないまま、やがて激しい孤独を味わう事になる。

## ○ 昇平の自宅

誰もいない室内

点けっぱなしになっているテレビからキャスターの声が聞こえる

テレビ音「・・・晴れ時々曇り、降水確率は10%、全国的に冬晴れの一日になりそうです。

以上本日のウェザーニュースでした」

番組が変わり、次の番組のオープニング音楽が流れる

それと同時に目覚まし時計のアラームが鳴る

テレビ画面にニュースキャスターが映る

テレビ音「おはようございます、7時のニュースです。皆さんは『孤独』という言葉をご存知でしょうか？今からさかのぼる事7年前、当時、西華医科大学精神医学研究所の橋本助教授がその孤独というものを発明しました。あまり広く公表されていない為ご存知ない方も多いかと思われませんが、発明された当時から現在に至るまで、全国の各自治体ではその導入を熱望する声が多数あがっております」

昇平、目が覚めて目覚まし時計のアラームを止める

テレビ音「そしてこの度ようやくこの街にも孤独の導入を検討する動きが起きました。市議会では導入案に対して連日連夜の会議が行われており、つきましてはこの度、孤独の模擬体験に協力して頂ける方を募集します。条件は15歳から25歳までの男女。健康状態は特に問いませんが、自立歩行および単身生活が可能な方。期間は3か月。その間、市が指定する住居に住まいを移せる方。任期満了の際、謝礼として300万円を支給致します。それではここで、橋本助教授が孤独の発明を公表した十年前の模様をご覧下さい」

テレビ画面が切り替わり七年前の様子

昇平、呆然とテレビ画面を見ている

## ○ 市役所・廊下

光が差し込む廊下

市役所の佐野が次々と名前を呼んでいる

佐野 「磯目さーん・・・柳井さーん・・・山中さーん」

名前を呼ばれた人達は立ち上がり、室内へと入っていく

昇平はぼんやりとしたまま椅子に座っている

佐野 「野中さーん」

昇平 「・・・」

佐野 「のなかふみさあーん」

史、眠っている

待合室には昇平と史の二人しかいない

佐野 「吉川さーん」

昇平 「あ、はい」

昇平、立ち上がり

昇平 「あの」

昇平、史の肩を軽く叩いて起こそうとする

昇平 「あの子……」

史、起きる

昇平 「順番、来たみたいですよ」

史 「え……」

昇平 「面接」

史 「あ……はい！」

史、慌てて立ち上がる

### ○ 市役所・面接室

面接官の篠ノ井と向き合い、受験者数名が座っている

篠ノ井 「志望動機は？」

史 「……」

史、うつむく

昇平、何も答えない史を見ている

篠ノ井 「野中さん」

史 「はい」

篠ノ井 「しばどーき」

史 「……はい」

問

篠ノ井 「お金？」

史 「うーん」

篠ノ井 「お金でしょ？」

史 「……うーん」

篠ノ井 「いいじゃないですかお金、私も300万円欲しいですよ」

史 「……はい」

篠ノ井、気をとりなおして

篠ノ井 「で、3ヶ月間」

篠ノ井、窺うように史を見る

昇平、史を見る

篠ノ井 「大丈夫ですか？野中さん未成年ですけど」

史 「はい、家族いなので」

篠ノ井 「はい、それは知ってます」

史 「あ、そうですよね」

篠ノ井 「あの、途中で逃げるのナシですよ？」

史 「大丈夫です」

篠ノ井 「ホントに!？」

史 「大丈夫です!」

篠ノ井、昇平を見る

篠ノ井 「吉川さん」

昇平、篠ノ井を見る

篠ノ井 「志望動機は？」

昇平 「孤独ってなんなのか知りたくて」

篠ノ井 「なるほど」

篠ノ井、昇平の言葉を用紙に書き留める

篠ノ井 「興味本位って事ですね」

昇平 「あ……いや、まあ……」

篠ノ井 「なんですか？」

昇平 「子供の時、あの祭典見たんですよ」

篠ノ井 「祭典？」

昇平 「孤独が発明された時の」

篠ノ井 「へえ！あそこに居たんですか？どうでした？」

昇平 「どう……って言われても……よくわからなかったですね」

篠ノ井 「何かたくさん降ってきたでしょ？いや私も見て驚きましたよ……まあ私はこの前

ニュースの資料映像で見ただけですけどね……あれ何だったんですか？」

昇平 「小さかったんで、あんまり覚えてなくて……」

篠ノ井 「で、孤独って結局なんだったんですか？」

昇平 「いや……俺に聞かれても」

佐野、篠ノ井をたしなめる

篠ノ井 「冗談ですよ、冗談」

篠ノ井、気をとりなおして手元の昇平の履歴書を見る

篠ノ井 「失礼ですが……吉川さんもご家族はいらっしゃらないとの事ですが」

昇平 「はい」

史、昇平を見る

無表情の昇平

篠ノ井 「では、以上です」

篠ノ井、笑顔で受験者達を見回す

篠ノ井 「結果の方は追ってご連絡致します。本日はお越し頂きありがとうございます」

篠ノ井、お辞儀

## ○ 大学（日替わり）

朝の教室

始業前の学生達がいる

昇平、席に着く

理沙 「吉川くん」

振り返ると石田理沙の姿

理沙 「風邪でもひいた？」

昇平 「え？」

そういえば、昇平は思いあたって

昨日の講義を休んで面接に行っていた事

昇平 「あ……まあそんな感じ」

理沙 「サボり？」

そう言って理沙は悪戯っぽく笑った

昇平 「……違えよ」

講義室のドアが開き、教授が入ってくる

理沙 「あとで昨日のノート写させてあげる」

理沙は小声でそう言い席に着いた

### ○ 授業中

教師が講義をする声

気だるそうな生徒達

昇平はぼんやりと窓の外を眺めている

冬の空

もうじき春がやってくる

そんなとりとめのない事をぼんやりと思った

### ○ 緑地広場・祭典の日（十年前の回想）

青い空

昇平、不意に空に手を伸ばし、顔に近づけたり遠ざけたりしている

千明 「なにしてるの？」

昇平、千明を見る

千明 「なにかあった？」

昇平 「別になにも」

千明、いたずらっぽく笑う

昇平 「手に焦点が合わなかった」

千明 「しょうてん？」

昇平 「手がぼやけてた」

広場に集う人々は一様に空を見上げている

テレビの中継車

慌ただしく撮影の準備をしている制作スタッフ達

千明、昇平と同じような仕草で空に向かって手を伸ばす

昇平 「……」（千明を見ている）

千明 「……」

千明、空に向かって手を伸ばしている

千明 （手を伸ばしたまま）「ねえしよちゃん」

昇平 「その呼び方やめろって言ってるだろ」

千明 「学校で何て呼ばれてるんだっけ？」

昇平 「吉川くん」

千明、昇平を見る

千明 「吉川くん」

昇平 「……」

○ 授業中の続き (回想明け)

教師が昇平を呼ぶ声

教師 「吉川くん」

昇平、はっとして

昇平 「はい」

教授 「なにか質問？」

昇平、空に向けて手を伸ばしている

昇平 「あ……いや、別に……なんでもありません」

○ 市役所へ続く坂道 (日替わり)

史、坂道を歩いている

その後方を歩いている昇平

史、疲れて立ち止まる

両手に重そうなビニール袋を下けている

昇平、やがてその距離を縮める

追いつく寸前で迷うが、史の脇で立ち止まる

史、昇平を見る

史 「あ」

昇平 「市役所の前までバスでてますよ」

史 「え、ああ……歩けると思って」

昇平 「歩けるけど、重くないですか？」

史、曖昧に微笑む

史 「吉川さん……ですよね？」

昇平 「はい」

史 「面接一緒だった」

昇平 「はい」

史 「二次審査通ったんですか？」

昇平 「はい」

史 (微笑む) 「あたしものです」

昇平、頷く

史 「野中史です」

昇平 「あ、どうも」

昇平、史が持っているビニール袋に目を留める

昇平 「それ」 (ビニール袋を指す)

史 「あ……そのスーパードライムセールやってて」

昇平 「……」

史 「あまりにも安かったので、つい」

昇平 「持ちますよ」

史 「あ、いや、いいですよ！」

昇平 「冷たい男みたいに思われるの嫌なんです」

昇平、史のビニール袋を取る

史 「あ……」

昇平 「遅れますよ」

史 「あ……はい」

昇平、ゆっくりと歩き出す

史 「ありがとうございます」

史、わずかに遅れて昇平の後を追う

### ○ 市役所・一室

篠ノ井と向き合い、昇平と史が座っている

篠ノ井 「で、選考の結果、お二人に決まった訳ですが……」

史 「決まった？」（驚き）

昇平 「……」

篠ノ井 「はい」

史 「最終面接……って聞いてたんですけど」（昇平を見る）

昇平、曖昧に首を傾げる

篠ノ井 「まあまあそれはそれとして、お二人に決まったんですよ」

史 「……あ、じゃあ……ありがとうございます」

昇平 「どうも」

篠ノ井 「で……三ヶ月間、お二人と一緒に住んでもらいます」

史 「一緒に？」

昇平 「……」

篠ノ井 「で」

二人、篠ノ井を見る

篠ノ井 「今すぐにご返答をお願いします」

昇平 「いま？」

篠ノ井 「はい」

間

篠ノ井 「で」

史 （嫌な顔）「まだ何かあるんですか？」

篠ノ井 「いやいややしません、これで最後です」（二人を見る）「お二人が一緒じゃないと

ダメなんですよ。例えば吉川さんがイエスで野中さんがノーだったら吉川さんも

この件はなかった事に……逆も同じですよ」

二人、顔を見合わせて

二人 「・・・」

篠ノ井 「一ヶ月、一緒に住めますか？」

二人 「・・・」

篠ノ井 「せーのっ！」

史 「ちよつとちよつと！」

篠ノ井 「何ですか？」

史 「いくら何でもいきなり過ぎて」

篠ノ井 「そうですよね」

うんうん、といった感じで頷く篠ノ井

篠ノ井 「でもそういう趣旨なんです」

二人 「・・・」

篠ノ井 「せーのっ！」

二人、無言

篠ノ井 「せーのっ！」

昇平、史を見る

昇平 (小声で) 「どうします?」

史 (昇平を見る) 「・・・」

篠ノ井 「はい、せーのっ！」

昇平 「俺は、別にいいですけど」

史、わずかにうつむく

篠ノ井 「せーのっ！」

### ○ 史のアパート (日替わり)

ベランダで洗濯物を取り込んでいる史

点けっぱなしになっているテレビにニュースキャスターが映っている

テレビ 「・・・先日お伝えしました孤独の発明に関しての続報です」

史、洗濯物を取り込み終えベランダから部屋に戻り、そのままたたみ始める

テレビ 「多数の応募者の中から3ヶ月間の体験者が決定致しました」

史、洗濯物をたたんでいる

テレビ 「尚、実施期間中の経過報告は規定により極秘とされておりますので、結果の方は

期間終了の後にご報告したいと思えます」

史、テレビを見る

テレビ 「この街に孤独の風が吹く事を、市民全員心から願っています (微笑む) 体験者の方、頑張ってください」

### ○ 二人の部屋 (一日目・朝)

薄暗い室内

鍵を開ける音

玄関のドアが開く

史 射し込む逆光の中、大きなポストンバックを抱えた史の姿  
「お邪魔しまあす」

史、おそろおそろ室内の様子を探る

史 「吉川さーん・・・いますかあ？」

静寂

靴を脱ぎ、室内に入る

何もない室内

史、室内を見回す

史 「・・・」

静寂

○ 二人の部屋・玄関外（一日目・夜）

昇平、玄関の前に立ち鍵を開けようとする

鍵を回しドアを引く

開かない

○ 二人の部屋・室内（一日目・夜）

ガタ、というドアの音

史、玄関を見る

鍵が空く音

ドアが開き、昇平の姿

史、にわかに緊張して立ち上がる

昇平、史の姿をちらりと見てから何も言わずに靴を脱ぐ

史 （ぎこちない）「あ・・・あの、こんばんわ」

昇平 「鍵閉まってなかったですよ」

昇平、部屋に入る

史 「あ、ああ・・・家にいる時はいつも閉めてなかったから」

昇平 「閉めなよ」

史 「・・・すいません」

昇平、コートを脱ぎ、自分のバッグの上に置く

史 （不意に）「でも鍵あいてると嬉しくないですか？」

昇平 「？」

史 「なんか・・・一人じゃないんだーっていうか」

昇平 「俺、ずっと一人暮らしたから」

史 「あ・・・そっか、すいません・・・今度からちゃんと閉めます」

昇平 「まあ、別にどっちでもいいですけど」

史、昇平のそっけない態度に落胆した様子

二人、微妙な距離感の中で気まずそう

二人 「・・・」

史 「あの、おいくつですか？」

昇平 「21」

史 「え！年下じゃん！私22」

昇平 「・・・」

史 「敬語つかって損した！」

昇平 「なにそれ、損って」

史 「もうちょっと年下っぽくした方がいいと思うな、これから一緒に暮らさなきゃいけないだし・・・あ、もしかしてまだ学生とか！？」

昇平、無言で玄関へ

史 「ちよつと！どこ行くの？」

昇平 「別に」

昇平、出て行く

史 「・・・」

史、室内を見回す

何もない

史Na 「あの男が家を出て行ったのは今から二ヶ月前」

### ○ 当時の史の自宅（史の回想）

史Na 「無意味なくらいに暑かった日曜日の午後」

帰宅した史、テーブルの上の書き置きに目を留める

史Na 「アイス買ってきてよ、というあいつに従い、私は近所のコンビニに行った」

テーブルの上の書き置きを手取る

史Na 「そのわずか数分間に、あいつはお気に入りのジーンズとお気に入りのポロシャツとお気に入りのスニーカーを身にまとって颯爽と逃げた」

史、書き置きを見ながら立ち尽くしている

史Na 「あんまり気に入ってないものは全部置いていった」

室内を見回す

史Na 「私はそれに含まれていた」

史、書き置きを見ながら立ち尽くしている

史 （読む）「今までありがとう」

史、書き置きを見ながら立ち尽くしている

史 「・・・」

手にしたコンビニの袋を壁に投げつける

### ○ 夜の街（一日目・夜）

夜の街

昇平、ぼんやりと街灯りを見つめている

篠の声 「あれ？」

昇平、声を向く

篠ノ井 「吉川さん、何してるんですか？」

昇平 「あ……ちよつと」

篠ノ井 「もう行かれました？新居」

昇平 「はい、さつき」

篠ノ井 「僕も見ておこうかと思って、最初くらいいちゃん仕事しようかなあって」

昇平 「……」

篠ノ井 「ああ！」

昇平 「……」

篠ノ井 「初夜かあ……邪魔ですかね？」

昇平 「別に」

### ○ 夜の公園（一日目・夜）

昇平と篠ノ井、ベンチに座っている

篠ノ井 「飲みます？」

篠ノ井、缶ビールを昇平に差し出す

昇平 「勤務中じゃないんですか？」

篠ノ井 「そうでしたっけ？」

昇平、笑いをもらす

篠ノ井 「あ、笑った」

昇平 「……」

篠ノ井 「ずっと黙ってるから怒ってるのかと思ってましたよ」

昇平 「別に怒ってないですよ」

篠ノ井、缶ビールを開ける

ふしゆ

ごくごく

篠ノ井 「いきなり一緒に暮らすって、ねえ？」

昇平 「……」

篠ノ井 「吉川さん一人暮らし長いんですか？」

昇平 「高校入ってからだから、もうじき丸6年です」

篠ノ井 「そっかあ、大変でしょ？」

昇平 「よくわかんないです、もう慣れちゃったんで」

篠ノ井 「そうですね、そんなもんですよ」

昇平 「……」

篠ノ井 「僕も女房と一緒にになって二十年くらいになるんですけど、最初の頃どうだったか

なんてもう覚えてないですもんね」

昇平 「……」

篠ノ井 「そんなもんですよ」

篠ノ井、ごくごく

篠ノ井 「寝る前に『おやすみ』って言える相手がいるって、悪くないですよ」

昇平 「・・・」

昇平 Na 「孤独という言葉は姉との最後の思い出だった」

× × × × × × × × × ×

○ 緑地広場・祭典の日(昇平の夢)

夕方の風景

昇平 「ねえ、ちいちゃん」

千明 「・・・ん？」

昇平 「さっきのなんだったの？」

千明 「なんだろう、よくわかんなかったね」

昇平 「・・・」

千明 「でもなんか、ちょっと恐かったな」

昇平 「なんで？別に恐くないじゃん」

千明、ちよつと笑って昇平の手を握る

千明 「なんか・・・ちよつと恐かった」

昇平、千明を見る

昇平 「じゃあ孤独ってやつ、もう見るのやめようぜ」

千明 「・・・」

昇平 「ちいが嫌なら俺も見ない」

千明 「しようちゃんは優しいねえ」

千明、微笑む

昇平 Na 「あの日の三日後、姉は死んだ」

× × × × × × × × × ×

○ 夜の街(夢)

昇平、街灯りを見つめている

どこからか音が聞こえる

昇平 「？」

あたりを見渡す

その時、空から何かが降ってくるのが見えた

その様子はどこかで見覚えがある、昇平は思った

音は徐々に大きくなり、次第にそれは轟音とも思えるほどにまで大きくなり

空から落ちてくる物体もその大きさと数を次第に増していった

流星郡のようにも砕け散った高層ビルの残骸のようにも見えた

昇平 「孤独だ・・・」

その光景は七年前のあの日、姉と一緒に見ていた孤独の発明によく似ていた

ブラックアウト

○ 二人の部屋・玄関外(一日目・夜)

昇平、玄関の前に立ちドアノブをひねる

開いた

昇平 「だから鍵閉めろって……」

○ 二人の部屋・室内（二日目・夜）

暗い室内

コートにくるまって眠っている史

ドアが空く音

史、玄関を見る

起き上がろうとするが、目を閉じて眠ったふり

昇平、部屋に入ってくる

昇平 「寝てんの？」

史 「……」

昇平、そのまま床に寝転ぶ

史 「……」

昇平 「篠ノ井さんと近くで会ってさ、ビールもらって飲んで、気がついたら寝てた」

史 「……」（起きているけど無視）

昇平 「夢みてたよ」

史 「……」

昇平 「けっこう昔の夢」

史 「……」

昇平 「夢ってなんで見るんだろうな？」

史 「……（なんだコイツ）」

昇平 「別に見たくもないのにさ」

史 「……」

昇平 「おやすみ」

変なやつ、史は思った

○ 二人の部屋（二日目・朝）

篠ノ井、がらんとした室内を見回す

篠ノ井 「本当に何も無いんだ……」

史 （微笑む）「びっくりしました」

間

史 「あー」

篠ノ井 「何ですか？」

史 「本当にただ暮らしてるだけでいいんですか？」

篠ノ井 「そうです」

史 「それで三百万円もらえるんですか？」

篠ノ井 「はい」

史 「ふうん」

篠ノ井 「もちろん、ある程度の規則はあります」

史 「規則」

篠ノ井 「ご自分が『孤独の発明』の体験者だという事は誰にも言わないで下さい」

史 「極秘、ですよね」

篠ノ井 「そうです（大きくうなづく）あと、一日一枚、写真を撮って下さい」

篠ノ井、鞆からポラロイドカメラを取り出してテーブルに置く

篠ノ井 「これで」

史、カメラを手に取って見る

篠ノ井 「二人が一緒に写ってる写真を毎日撮って、日付と場所を書き込んで、玄関のポスト

に入れておいて下さい。係のものが毎朝取りにきますから」

史 「・・・」

篠ノ井 「言い方悪いですけど、一緒に暮らしてるっていう証拠をね・・・規則ですから」

史 「撮れない日はどうするんですか？」

篠ノ井 「例えばどういう理由で？」

史、考える

史 「吉川さんが家に帰ってこなかったり」

篠ノ井 「駄目ですよ帰ってこなきゃ、ここが家なんだから」

史 「・・・」

篠ノ井 「ただ、二人で温泉とかに一泊旅行しちやったりするのはいいです」

史 「嫌な顔」「そんな事しませんよ」

篠ノ井 「その場合はそこで写真を撮ってきて下さい。二日分まとめて入っていればこちらも

それで納得しますから」

史、無言でカメラをいじっている

史 「・・・遊園地は？」

篠ノ井 「いいじゃないですか、パレード観ながらとかね」

史 「楽しそうに」「水族館は？」

篠ノ井 「それただのデートじゃないですか」

史 「・・・」

## ○ 二人の部屋（二日目・夜）

ポラロイド写真を見ている昇平

昇平 「あー、上手い具合に半分ずつですね」

昇平と史の顔が半分ずつしか写っていない写真

史、んあああと唸りながら昇平の前方でカメラを持つ手を思いつきり伸ばしている

昇平 「離れたらいいんじゃないですか？」

史 「振り返る」「えっ？」

昇平 「野中さんそこで自分の顔写して（史の斜め後ろに移動）で、俺がここ」

史、カメラを構える

史 「入ってますか？」

昇平 「いや、撮らなきゃわかんないけど」

史 「そっか・・・じゃあ撮る」

カシヤ

史、フィルムを引き抜く

二人、身を寄せ合ってフィルムが乾くのを待っている

間

史 「私やばいね、この顔」

昇平 「おれ背後霊っぽいな」

二人、顔を見合わせる

その距離が近くてあわてて離れる

### ○ 市役所・一室(三日目・朝)

ポラロイド写真を見ながら電話をしている篠ノ井

篠ノ井 「いや、確かに写ってますけどね・・・これじゃあまりにも色気ないでしょ」

篠ノ井、昨夜撮った昇平と史の写真を見ている

### ○ 二人の部屋(三日目・朝)

テーブルに置かれたカメラ

史、少し離れた位置から手を伸ばし、ハンガーでボタンを押そうとしている

史 「・・・んあああ」

押せない

### ○ 二人の部屋(六日目・夜)

部屋にはある程度の家具がそろっている

食事をしている二人

史 「そういえば吉川さんって何の仕事してるんですか？」

昇平、箸を持ったままちらりと史を見る

昇平 「出版関係」

史 「それどういのですか？」

昇平 「エロ本」

史 「・・・」

昇平 「・・・」

史 「・・・」

昇平 「冗談だよ、大学生」

史 「そうなんだ」

間

黙々と食事

史 「うどんとそばどっち好き？」

昇平、箸を持ったままちらりと史を見る

ややの間

昇平 「そば」  
史 (残念そう) 「……あたしうどん」

間  
黙々と食事

史 「じゃあ、水族館と遊園地は？」

昇平、史を見る

間

昇平 「行った事ない」

史 (驚く) 「うっそお？」

昇平 「嘘」

史 「……」

昇平、含み笑い

史 「なにおかしいのよ？」

昇平 「別に」

史 「……」

### ○ 熱帯魚屋(七日目・昼)

水槽の中を見つめている史

史 「おおお……」(見とれている)

昇平、史に歩み寄り、同じような姿勢で水槽を見る

昇平 「おお」

史 (水槽を見ながら) 「こんなにちゃんと見るの初めてかも」

昇平 「俺も」

史 「好きだから来たんじゃないの？」

昇平 (水槽を見たまま) 「いや……初めて」

史 「そうなんだ」

昇平、水槽の中の熱帯魚を目で追っている

昇平 (嬉しそう) 「うおお……よく見るとけっこう気持ち悪いな」

史、昇平を見る

史 「飼いたい？」

昇平 「え？飼わねえよ、育てるの大変らしいし」

史 「あたしやるよ？」

昇平、史を見る

史 「あたしけっこう、そういうのできるよ」

間

昇平 (苦笑) 「他に育てなきゃいけないのあるでしょ？」

史 「？」

昇平、史の腹を指す

史、自分の腹を見る

○ 公園

休日をごす人々の姿

史、ベンチに座ってぼんやりと辺りを眺めている

やがて歩み寄る昇平の姿

ソフトクリームと紙コップを持っている

史 (昇平が手にしたソフトクリームを見て)「あ」

昇平、史の眩きには気付かずソフトクリームを渡す

史 「あつたんですか？」

昇平 「あつた」

昇平、ベンチに座る

二人、ぼんやりと

穏やかな風景

史、ちよつとだけ食べたソフトクリームを昇平に差し出す

史 「あげる」

昇平 「あ、俺いい」

史 「あげる」

間

昇平 「甘いもんだメなんだよ」

史 「・・・じゃあ捨てる」

昇平 「おい、食べたいって言ったの誰だよ」

史 「別に・・・食べたいなんて言っていないし」

間

史 「・・・ごめんなさい」

昇平、史を見ている

やがて、史の手からソフトクリームを取る

史 「・・・」

昇平 「じゃあこっちやるよ」

昇平、紙コップを史に渡す

史 「・・・」

昇平 (なめてしかめ面)「あま・・・」

史、昇平を見ている

昇平 (ぼんやりと景色を眺めている)「全部飲むなよ」

史 「うん」

二人黙ったままぼんやりと景色を眺めている

史 「あたしね・・・」

昇平 「なに」

史 「男に逃げられたんです」

昇平 「・・・」

史 「多分・・・子供できたから」

昇平、ソフトクリームをなめている

史 「夏に」

昇平 「……」

史 「アイス買って来いって言われて……」

昇平 「……」

史 「コンビニ行って、帰って来たらいなかった」

史、つくり笑いで昇平を見る

昇平、頑張ってソフトクリームを食べている

史 「……」

昇平 「……」

史 「ごめん、あたし食べるから」

史、昇平からソフトクリームを受け取ろうとする

昇平、渡そうとせず食べ続けている

史 「ごめん……」

昇平 「いちいち謝んなよ」

史 「ごめ……」

昇平、笑いを漏らす

昇平 「逃げられて良かったじゃん」

史 「……」

昇平 「そんな奴が親父になったら幸せになれねーぞ」

史 「……」

それから微笑む

史 「うん」

史、思いついたようにバッグからカメラを取り出して昇平に向ける

史 「吉川さん」

昇平、見る

カシヤ

### ○ 市役所・一室（八日目・朝）

ポラロイド写真を見ながら電話をしている篠ノ井

篠ノ井 「だってこれ野中さん写ってないじゃないですかあ」

ソフトクリームを持っている昇平の写真

### ○ 二人の部屋（八日目・朝）

電話をしている史

史 「だから撮ったのはあたしですって……え？他にも撮りましたけどお……」

「じゃあ今度ウチに来た時に見せますよ」

二人が写っている写真がテーブルに置かれている

史、その写真を手に取る

史 「えーだってえ・・・上手く撮れたから渡しちゃうのもつたないかなあつて」  
寄り添っている二人の写真

### ○ 居酒屋（十五日目・夜）

昇平と篠ノ井、カウンター席で隣り合って座っている

篠ノ井 「上手くいつてるみたいじゃないですか」（機嫌良さそう）

昇平 「まあ・・・まあ、そうですね」

篠ノ井 「写真の裏にいつも一言書いてあるんですよ」

昇平 「え？」

篠ノ井 「しょうちゃんと熱帯魚を観ました、とか。娘の日記読んでるみたいですよ」

昇平、苦笑

篠ノ井、微笑む

篠ノ井 「野中さん、きつと嬉しいんですよ」

昇平 「・・・」

篠ノ井 「子供できちゃって不安なのに、旦那さんいない訳でしょ？」

昇平 「そーみたいですね」

篠ノ井 「小さい頃にご両親も離婚なさってるし」

昇平 「ああ、そうなんですか」

篠ノ井、しゃべりすぎた雰囲気

篠ノ井 「あ、聞いてませんでした？・・・じゃあ内緒で」

昇平、軽く頷く

篠ノ井 「ずっと寂しかったんじゃないかなあ」

昇平 「そうかもしれないですね」

篠ノ井 「だから、吉川さんがいるから嬉しいんですよ」

昇平 「・・・」

### ○ 二人の部屋（十五日目・夜）

キッチンに立つ史

楽しそうな様子

史 「できた」

史、満足気な顔

### ○ 大学のテラス（十六日目・昼）

ベンチに座っている昇平

史から渡された弁当箱を開く

昇平 「・・・うお」

石田 「なにそれ？」

昇平、慌てて蓋を閉じる

昇平 （慌て）「あ・・・ああ、いや」

歩み寄った石田が弁当箱に気付く

石田 「まさか？」

昇平、言葉がでない

昇平 「え・・・いや別に」

石田 「いいなあ、私も誰かにお弁当つくってあげたいなあ」

昇平 「いやだからそういうんじゃないって」

石田、疑いの視線

石田 「あーいいなあ」

石田、立ち去る

昇平、開ける

可愛らしく盛りつけされている

昇平、しばらく眺めた後、笑いを漏らす

### ○ 都会・カウンセリング室（二十八日目・昼）

女、伏し目がちで椅子に座っている

その向かいには白衣を着た橋本が座っている

沈黙

二人の様子を壁際に立って見ている篠ノ井

女 「わたし・・・」（小声）

橋本 「・・・」

女 「話し相手が周りに誰もいなくて」

橋本 「職場の同僚とか、家族とか、誰かと話す機会はありますか？」

女 「いえ、相手にされてませんから。わたしって・・・いてもいなくても同じなんです」

橋本 「じゃあ例えば、気にかけてもらって自分の事を尋ねられたら、嬉しいですか？」

女 「・・・」

女、力なく首を振る

女 「わたしって孤独なんですか？」

橋本 「・・・」

篠ノ井が壁際に立ってその様子を見ている

### ○ 都会・病院中庭

ベンチに座っている篠ノ井と橋本

橋本 「さきほどの女性は人間関係に過敏になりすぎて少し怯えてしまっているんです」

篠ノ井 「・・・」

橋本 「コミュニケーションの不和なんて誰もが一度は抱える問題でしょ？」

篠ノ井 「そう・・・かもしれないですね」

橋本 「孤独とは全く別の問題で、孤立というべきでしょう。感情ではなく状況の問題です

から」

橋本、わかりますか？という感じで篠ノ井を見る

篠ノ井、曖昧な表情

穏やかな風景

芝生の上で幼い子供と看護婦がシャボン玉遊びをしている

無邪気な笑顔

二人、無言でその様子を眺めている

緩やかにシャボン

橋本 「孫娘が・・・ちょうどあのくらいの年頃です」

篠ノ井 「ええ」

橋本 「孤独ってなに？ってしきりに聞かれた事がありましたね」

篠ノ井 「・・・何て？」

橋本 「君はまだ知らなくていいんだよ、と答えました」

二人の視線は子供の方に向けられている

子供の声「見て！大きい！」

看護婦は慈しむような表情を浮かべている

篠ノ井 「お孫さんはそれで納得しましたか？」

橋本、微笑んで首を横に振る

橋本 「幼い頃はたくさん愛されて守られているだけでいいんです」

篠ノ井 「・・・」

橋本 「お」

二人の元にシャボン玉がゆつくりとたどり着いた

それを見上げた篠ノ井の目にはシャボンに透けて揺れる青い空が映った

## ○ 市役所・一室（二十九日目・朝）

職員 of 佐野、篠ノ井に歩み寄る

佐野 「篠ノ井さん」

篠ノ井、見る

佐野 「昨日どうでした？」

篠ノ井 「うん、まあ経過報告って感じかな」

佐野 「で、孤独ってなんだったんですか？」

篠ノ井 「え、ああ」

問

佐野 「聞いてないんですか？」

篠ノ井 「いや、切り出すタイミングがなかなかなくて・・・」

佐野 「もおお、ちゃんとして下さいよ、何だかわかんないまま仕事するの気持ち悪いじゃないですか」

篠ノ井 「だって今さら聞けないよ、それこそ知らないって言ってるのと同じでしょ？」

佐野 「実際、知らないじゃないですか」

篠ノ井、手で制す

篠ノ井 「佐野くん」

佐野 「なんですか？」

篠ノ井 「担当者が自分の担当してる仕事内容知らないって、それは大問題だよ。いち社会人としてあるまじき行為だ、わかる？」

佐野 「は？」

篠ノ井 「ちなみに僕は知らないんじゃない、確信がもてないんだ」

佐野 「……」

篠ノ井 「孤独がなんなのかだいたいわかってるよ。ただ、まだ確信がもてない、だからまだ言えない」

佐野 「うわ……最低」

篠ノ井 「僕こう見えて、内に秘めちゃうタイプだから」

佐野 「もういいです、あたし自分で調べます」

佐野、立ち去る

篠ノ井 「佐野くん」(呼び止める)

佐野 (振り向き) 「なんですか？」

篠ノ井 「わかったらすぐに報告して」

佐野 「嫌です」

佐野、立ち去る

篠ノ井 「佐野くん、おい」

### ○ 商店街・マーケット前(三十七日目・夕)

レジで会計を済ませた史がスーパーのビニール袋を持って店から出て来る

### ○ 商店街・アーケード

史、歩きながら片手で携帯電話を操作している

### ○ 昇平の大学

講義室の昇平、携帯の受信に気付いてポケットから取り出す

史からのメール

昇平、笑いを漏らす

昇平の背後を通りかかった石田、携帯を覗き込む

石田 (史からのメールを読む) 「夕飯は……鍋に……」

背後からの声に驚いた昇平、振り返る

石田、含み笑いをしている

昇平、慌てて携帯を閉じる

昇平 「何だよ？」

石田 「彼女から？」

昇平 「彼女じゃねーよ」

石田 (昇平を見て) 「顔がニヤけてたけどねえ」

昇平 「……」

○ 商店街・アーケード

史、ビニール袋を片手に歩いている  
その前方、古着屋の軒先でしゃがみ込んでいる男女の姿  
二人は手を繋ぎ合い、軒先に並べられた小物を楽しそうに見ている  
史、何気なくその二人を見る  
男が履いている靴に見覚えがある  
史、二人と距離を保ち立ち止まる

史 「・・・」

史、男の横顔を見つめている

○ 当時の史の自宅（史の回想・数ヶ月前）

蝉の鳴き声が聞こえる  
蒸し暑い夏の午後  
気怠い午後  
カーテンが揺れる度に射し込む日射し  
それが史を射る  
汗ばんだ額に前髪が張り付いている  
泥酔して弛緩した身体のようにぶら下がっている右手のビニール袋  
左手で掴んだメモ  
左手で張り付いた前髪をわける  
そしてもう一度その一行に目をやる  
史 「今までありがとう」

史

史、玄関を見る

○ 商店街・アーケード（数ヶ月前）

急ぎ足で歩いている逃げた男  
黒い革のスニーカー  
どこにでもあるスニーカー  
男が気に入っているスニーカー  
よく履き込まれているスニーカー  
逃げた男、立ち止まり汗を拭う  
躊躇うようにわずかに振り返る

○ 商店街・アーケード

史、立ち尽くし男の横顔を見つめている

史（小声で）「ふざけんな・・・何があるがとうだ」

史、歩き出す

二人の背後を通り過ぎる

二人、気にも留めていない様子





コール音、やがて繋がる

昇平 「あ、石田？ちよつと頼みたい事あんだけど今から出て来れる？・・・うん、ちよつと・・・  
住所言うから、いい？」

### ○ファミレス

窓際のテーブル席に座っている史

ぼんやりとした様子

窓の外を篠ノ井が通りかかり、史に気付く

史、気付かない

篠ノ井、店内に入り史の向かいに座る

史、顔を上げる

史 「あ」

篠ノ井 「何してるんですか？」

史 「・・・」

篠ノ井 「吉川さん心配してますよ」

史 「・・・」

篠ノ井 「さっき電話あつて、連絡とれないから何かあつたんじゃないかって」

店員が二人のテーブルに歩み寄る

篠ノ井 (店員を見て) 「あ、すみませんすぐ出ますから」

店員、立ち去る

篠ノ井 (史を見て) 「勘違いされちゃったかな？こんな時間におじさんと若い女の娘で」

史、薄く笑う

篠ノ井 「何かあつたんですか？」

史 「・・・」

篠ノ井 (笑う) 「家、すぐそこじゃないですかあ(指さす) 見つけてくれって言ってるような

もんでしょ？」

史 「・・・」

篠ノ井 「ほら、行きましょ」(立ち上がろうとする)

史、うつむいたまま

史 「あたし、いつも捨てられるんです」

篠ノ井 「・・・」

史 「なんでだろ・・・」

篠ノ井 (座り直し) 「・・・吉川さんと何かあつたんですか？」

史、首を振る

篠ノ井 「・・・」

史 「気がつくといつもひとりぼっちになつてる」

篠ノ井 「・・・」

史 「なーんにも悪い事してないのに」

篠ノ井 「・・・」

史 (篠ノ井を見る) 「血筋なのかな?」

篠ノ井 「え?」

史 (つくり笑い) 「母も父に捨てられたんです、あたしもセットで」

篠ノ井 「・・・捨てられるとか、そういう言い方やめましようよ」

史 「じゃあ他になんて言えばいいの?」

沈黙

史、視線を落とす

史 「そのうちしょうちゃんだつていなくなるし」

篠ノ井 「・・・」

史 「こんな事しなきゃ良かった」

篠ノ井 「・・・」

史 「どうせまたひとりになるなら、初めからずっとひとりであれば良かった」

篠ノ井 「そんな事・・・ないですよ」

史 「いつかなくなるなら、もう何も欲しくない」

篠ノ井、立ち上がったって史の手を引く

### ○ 街中・路上

昇平、小走りで史を探している

× × × × × × × × × ×

### ○ 団地(昇平の回想・十年前)

学校の帰りの昇平が歩いている

ひそひそ話をしている二人の主婦の声がどこからか聞こえる

主婦1 「吉川さんの娘さん即死だったみたいよ」

主婦2 「居眠り運転のトラックでしょ? ホントついてないよね」

昇平、立ち止まりその声を聞く

主婦1 「可愛い子だったのにねー」

主婦2 「奥さん相当まいっちゃってるみたい」

道ばたで話をしている二人の主婦

昇平は二人の主婦を見下ろすかたちで少し高い位置に立っている

主婦は昇平に気付いていない

主婦1 「そうそうそれで、その事故現場を弟さんが見ちゃったみたいで」

主婦2 「ええええホントに?・・・昇平くんだったっけ? まだ小学生じゃなかった?」

主婦1 「悲惨でしょ?」

主婦2 「そういえば二人でいるとこ良く見かけたわ、今時珍しかったよね、あんな仲いい兄弟って」

兄弟って

主婦1 「噂によると、お姉ちゃん学校でいじめられてたみたいで」

主婦2 「ええ? そんな感じ全然しなかったけど・・・そうなんだ」

主婦1 「何かちょっとお高くとまってる雰囲気なかった? それでじゃない」

主婦2 「ああ、綺麗なだけに余計そんな感じするかも」

昇平 「誰がいじめられてたって？」

二人、突然の声に驚いてその方を見る

昇平 「誰の話してたんだよ？」

主婦1 (作り笑い)「ああ、昇平くん……学校の帰り？」

昇平 「言えよ」

二人 「……」

昇平 「誰の話してたか言えよ」

二人 「……」

昇平 「早く言えよ」

主婦2 「あ、いや……あの……昇平くんが知らない人の話だよ」

主婦1 「うん、そう、全然関係ない話」

昇平 「……」

昇平、ランドセルを下ろす

昇平 「ねえちゃんの悪口言うな」

二人 「……」

昇平 「おまえらが死ねば良かったんだ」

昇平、ランドセルを振りかぶり二人に向かって投げ落とす

× × × × × × × × × ×

○ 街中・路上

トラックが走り去る

横断歩道で信号待ちをしている昇平

○ 二人の部屋・玄関(深夜)

ドアが開く

篠ノ井と史の姿

音に気付いた石田が駆け寄る

石田 (二人を見て)「あ……」

篠ノ井 (石田を見て)「あ……」

史 「……」

ややの間

石田 「あ……あのお、吉川くんに言われて……留守番してろって」

○ 二人の部屋

史、篠ノ井、石田、リビングテーブルについている

石田 (気を取り直したように)「あ、私……帰りましようか？」

篠ノ井 「吉川さんすぐ戻って来るでしょ、それまでいた方が」

石田 「……」

史 「……すいません」

石田 (史を見る)「……わかりました」

間

チャイムの音

石田 (素早く反応して玄関を見る) 「あ、来た」

史と篠ノ井、玄関を見る

石田、立ち上がり玄関へ

石田の声 「ちようどさつき・・・中にいるよ」

篠ノ井、史を見る

篠ノ井 「野中さん」

史 「・・・」

篠ノ井 「ごめんなさいって、素直に言いましょ」

史 「・・・」

篠ノ井、微笑む

史、部屋の入り口を見る

昇平の姿

史を見ている

その背後に石田

石田 (小声で) 「何もなかったみたいだし、怒らないであげて」

昇平 「・・・」

史 (昇平を見て) 「あの・・・」

昇平、何も言わず史に歩み寄り頭をくしゃくしゃと撫でる

史、驚いてされるがまま

昇平、そのまま史の向かいに座る

篠ノ井と石田、その様子を眺めている

昇平 「飯は？」

史 「あ・・・」

昇平 「何かつくるって言ってたじゃん」

史 「材料・・・どつかいっちゃった」

昇平 (笑う) 「何だそれ」

雰囲気が和む

史、立ち上がる

史 「何か買ってくる、何がいい？」

石田 (慌てて) 「いいよ、私行くよ」

昇平 「いいって」

ややの間

昇平 (石田を見て) 「石田ありがとな、こんな時間に」

石田 「ううん、全然」

昇平 (篠ノ井を見て) 「篠ノ井さんも、すいません」

篠ノ井、いやいやといった感じで手を振る

史、昇平を見る

史 「しょうちゃん」

昇平、史を見る

史 「ごめんなさい」

昇平、軽くうなづく

昇平 「玄関・・・閉まっててちよつと寂しかった」

史 (微笑む)「でしよ?」

昇平 「今度から、遅くなんなら電話ぐらいしろよ」

史 「うん」

### ○大学の学食(三十八日目・昼)

テーブル席に向かい合って座っている昇平と石田

食事中の二人

石田 (唐突に)「で、結婚するの?」

昇平 (箸を止め石田を見る)「結婚?」

石田 「なにとぼけてんのよ?昨日の話」

昇平 「ああ」

石田 「めっちゃ、驚いたよ」

昇平 「・・・」

石田 「子供できて一緒に住んでんだもん」

昇平 「俺の子供じゃねえよ」

石田 「え?」

間

昇平 「ただの同居人」

石田 「まじ?」

昇平 「まじ」

石田 「何で一緒に住んでんの?」

昇平 「・・・」(もくもくと箸を動かしている)

石田 「・・・」

昇平 「今度話すわ」

石田、腑に落ちない様子で食事再開

食事中の二人

石田 「旦那さんは?どこでなにしてんの?」

昇平 「いない」

石田 「いない?」

石田、箸を止めて昇平を見つめる

昇平、気にせず

石田 「吉川くん何してるの?」

昇平 「・・・いまいちよくわかんねえ」

学生達の笑い声が聞こえる

○ 二人の部屋（三十八日・夜）

昇平に背を向けてテレビを見ている史  
リビングテーブルの昇平

昇平、史を見ている

昇平 「昨日どこ行ってたの？」

史、やや動揺

史 「ん……ちよつと」

昇平 「……」

沈黙

テレビから聞こえる笑い声

史 「心配した？」

昇平 「……別に」

史、振り返り昇平を見る

昇平、やや動揺

昇平 「ちよつとした」

史、テレビに向き直る

間

史 「すぐそのファミレスにいた」

昇平 「何で？」

史 「嫌な事あったから」

昇平 「……」

史 「部屋に一人でいたくなかったの」

テレビから聞こえる笑い声

昇平 「俺いるじゃん」

史 「……」

沈黙

史 「チャンネルかえていい？」

昇平 「……いいよ」

史、リモコン操作

間

史 「次の休み……しょうちゃんのお姉さんのところ行こうよ」

昇平 「……」

ややの間

史 「……って言ったら怒る？」

史、振り返り昇平を見る

不器用な笑顔

史 「行こうよ」

○ 昇平の故郷・電車内(四十一日目・昼)

車窓からの田舎の風景

昇平と史、座席に座り景色を眺めている

○ 二人の部屋・玄関外(四十一日目・朝)

佐野、ポストを開けて写真を取り出す

写真にはメモが貼付けられている

佐野 (読む)「旅行に行つてきます・・・ハート」

メモを見つめたまま固まっている

佐野 (呟き)「ついに・・・結ばれちゃう?」

佐野、夢見がちな表情で遠い目をしている

○ 昇平の故郷・車内(四十一日目・昼)

軽ワゴンの後部座席に座っている昇平と史

運転席の今野

今野 (後部座席の二人を振り返り)「んできあ、こつちやたまげるべ?」

史、昇平を見る

昇平、苦笑

今野 「いきなし電話かかってきてさあ、金曜にそっち行くから車出してくんねえかとか

言うもんでよ、んな事急に言われたってこつちだつてえ・・・」

昇平 (慌てて)「前!危ねえつて!」

今野、前方に向き直る

史、笑う

今野、バックミラー越しに史を見る

今野 「史ちゃんだっけ?」

史 「はい」

今野 「今日だつてコイツに急に言われたんでしょ?」

史 「いえ、あたしが連れてつてつて頼んだんです」

今野 「本当に?そう言えつて言われたんたべ?」

史、昇平を見る

史 (含み笑い)「はい」

昇平、苦笑

今野 「ほら、やっぱ」

満足そうな今野

今野 「おめえ昔っからそうだな」

○ 昇平の故郷・墓地

墓前に立っている昇平と史

史 (墓を見たまま)「お姉さん、幾つで?」

昇平 「十八」

史 「しょうちゃんは？」

昇平 「十一」

史 「そっか」

間

昇平 「ねえちゃんも俺の事しようちゃんって呼んでてさ」

史 「……」

昇平 「その呼び方やめろって言うてるのに（苦笑）ガキだったから、恥ずかしかったな」

史 「……」

坊主の声 「おめえ、またバンドかあ！」

昇平と史、声を見る

箒を持った坊主が大声で息子に呼びかけている

坊主 「今どきパンクなんか流行んねえって何遍言わせんだ？」

派手な髪型、皮ジャンとギターケース、息子が立ち止まって坊主を見る

息子 「パンクじゃねえ！ ロックだ、ハゲ！」

坊主 「おめえもそのうち坊主だねえか、そんなもん止めて経のひとも覚えとけ！」

息子 「おめえが死んだらこころイブハウスにするって言うてんだらうが！」

坊主 「仏さんの墓どうすっだ？ このバチ当たりが！」

二人、そのやり取りに笑いを漏らす

史 「会ってみたかったな、しょうちゃんのお姉さん」

昇平 「……」

史 「あたし一人っ子だったから、そういうの何か羨ましい」

間

昇平 「篠ノ井さんから聞いたけど……親の事とかも」

史 「……」

昇平 「捨てられたとか、そんなんじゃねえよ」

史 「……」

昇平 「お前は何も悪くない」

史、ふうと息をつく

吐息が白く

史 「わかってるよ」

昇平 「……」

史 「もう昔の事だし……男の事だって、いま思えばあんな奴いなくなつて

良かったって思うし」

昇平 「ああ」

史 「だから、もう全然いいんだけど」

昇平 「……」

史 「でもさあ、許せないんだ」

昇平 「……」

史 「ただ許せないだけ」

史、はあと息をつく  
吐息が白く

### ○ 昇平の故郷・車内

軽ワゴンの後部座席に座っている昇平と史  
運転席の今野

今野 「ける？」

今野、振り向く

今野 (興奮した様子) 「けるつておめえ、さつき来たばつかじゃねえか？」

信号、赤

史 (慌てて) 「あ、赤！」

今野、とつさに前を見る

ブレーキ

急停車

今野 「あつぶねえ・・・」

二人、呆然

ややの間

今野、振り向く

今野 「せつかくなんだからみんなに嫁さん紹介してけや」

昇平 「・・・」(史を見る)

史、何とも言えない表情

今野 「・・・」

### ○ 昇平の故郷・広場

青い空

昇平、広場を歩いている

史と今野、車の付近で昇平の姿を遠目に見ている

今野 「訳ありだな？」

史 「え？」

間

今野 「吉川の子供じゃねえの？」

史 「・・・はい」

今野 「あいつ知ってんのか？」

史 「はい」

今野 「そっか」

間

今野 「あんま言いたくねえか？」

史 「どうかな・・・わかんないです」

今野 「わかんねえって……(苦笑) 自分達の事だべ」

史、昇平の方を見る

史 「そうですよね」

昇平、芝生に座ってぼんやり

今野 「事情は知らねえけど、人様に言えねえ事だけはしちやいけね」

史 「……」

今野 「一回逃げちまうと元の場所戻るのしんどくなるしさ」

今野、昇平の方を見る

今野 「あいつ悪い奴じゃねえから」

史 「はい、わかります」

今野 「愛想は悪いけど」

史、笑いをもらす

間

史 「孤独、って知ってますか？」

今野 「こどく？」

史 「十年前に発明されたらしいんですけど」

今野 「いんやあ、難しい事は俺わかんねえな……何なの？それ」

史 「いえ……最近ちよつとニュースで聞いたから」

史、広場を見る

芝生に寝そべって空を見ている昇平の姿

今野 (昇平を見て) 「あいつ寝ちまったんじゃねえの」

史、昇平を見ている

### ○ 昇平の故郷・ホテル一室

薄暗い室内

ツインルーム

別々のベッドで寝ている昇平と史

史 「起きてる？」

昇平 「起きてるよ」

間

昇平 「どうした？」

間

史 「あの時」

間

史 「あの……ファミレスにいた日」

昇平 「ああ」

史 「前の男に会ったの」

昇平 「……」

史 「偶然、商店街で」

昇平 「・・・ああ」  
史 「女といて・・・多分、今の彼女」  
昇平 「・・・」  
史 「それだけ」  
昇平 「何だそれ？」  
史 「だからそれだけ」  
昇平 「お前いつも途中で止めるよな」  
史 「・・・」  
昇平 「言いたい事あるなら言えよ」  
史 「・・・」  
昇平 「・・・」  
史 「しょうちゃんは？」  
昇平 「なにが？」  
史 「なんか言いたい事ないの？」  
昇平 「別がないよ」  
史 「じゃあ言いたくない事言つて」  
昇平 「・・・」  
史 「隠してる事とか、今まで誰にも言えなかった秘密の話してよ」  
昇平 「・・・」  
史 「・・・」  
昇平 「そんなのないよ」  
史 「・・・」  
昇平 「・・・」  
史 「あたしあるよ」  
昇平 「・・・」  
史 「・・・」  
昇平 「いいよそんなの、言わなくて」  
史 「あたしは・・・今まで自分の事すごい可哀想だつて思ってた」  
昇平 「言わなくていいって」  
史 「でも、最近は思わない」  
昇平 「・・・」  
史 「しょうちゃんと一緒にいると楽しいから、今までの事、別に気にしなくなった」  
昇平 「・・・」  
史 「でもやっぱり・・・ちよつと怖い」  
昇平 「・・・」  
史 「この子が生まれて、可愛いつて思えなかったらどうしよう」  
昇平 「・・・」  
史 「どうすればいい？」  
昇平 「・・・」

史 「色んな事・・・ずっと忘れられないじゃん」

昇平 「・・・」

史 「・・・」

昇平 「それが恐いの？」

史 「・・・」

昇平 「それが恐いのかって聞いてんだよ」

史 「・・・」

昇平 「言えよ」

史 「恐い」

昇平 「・・・」

史 「・・・」

昇平 「それ、今から俺の子な」

史 「・・・」

昇平 「その子、可愛くなかったら半分俺のせいにしていいよ」

### ○ 二人の部屋・玄関外(四十二日目・朝)

佐野、ポストを開ける

写真はない

佐野 「・・・ない」

ポストの中を見つめたまま固まっている

佐野 (呟き)「ついに・・・」

佐野、夢見がちな表情で遠い目をしている

史Na 「時間を戻せるならどこまで戻す？あたしがそう聞くとしようちゃんは戻さないと答えた。それよりも早く進ませたいと言った」

### ○ 昇平の故郷・ホテル一室(四十二日目・朝)

同じベッドで寄り添い合い眠っている昇平と史

史Na 「子供が生まれたら史とセックスできるから。それって人生最大で嬉しかったのに、恥ずかしすぎたから朝が来るまで眠ったふりをした」

### ○ 出版社・一室(四十五日目・昼)

室内雑観

デスクに置かれた昇平と史の写真

しかしその写真はいつものポラロイドではない

編集長、デスクの写真を手にとって見る

編集長 (写真を見たまま)「これどいつ？」

木村 「○○県です」

編集長 「何でこんなところにいんの？」

木村 (含み笑い)「さあ?」

編集長 「何だよ、知らねえの？」

木村 「知ってますよ」

編集長 「……」

木村 (含み笑い)「あたしだいたい知ってますよ」

編集長 「やっぱ木村ちゃんはすごいねえ、何でも知ってるもんなあ」

編集長、その皮肉まじりの言い方

木村 「……」

編集長 「でも俺、知らなくていいや」

木村 「写真週刊誌に怖いものなんてあるんですか？」

編集長 「木村ちゃん」

木村 「はい？」

編集長 「出口あっち(指さす)知ってる？」

木村 「ああ、あれ出口だったんですか？入口かと思ってました」

問

編集長 「落ちつけよ」

木村 「……」

編集長 「何度も言ってるけどこの件に首つつ込むな、記事にはならない、損するのお前」

木村 「……」

編集長 「先輩からの真面目なアドバイス」

問

木村 「わかりました」

木村、デスクの写真を取り、無造作にバックに入れる

### ○ 市役所・資料室(五十一日目・昼)

書庫のような一室

佐野、本棚から資料を探している

やがて本が見つかり、棚から抜き出す

佐野、ページをめくり見ている

### ○ 市役所・一室(五十一日目・昼)

佐野、篠ノ井のデスクに歩み寄る

佐野 「篠ノ井さん」

篠ノ井 「ん？」

佐野 「これ」(資料のコピー)

篠ノ井 「ん？」

篠ノ井、受け取って見ている

篠ノ井 「あれ、これ教授?・・・若いなあ」

佐野 「十六年前です」

篠ノ井、記事の中の『孤独の発明』という文章に気付く

篠ノ井 「お！」

篠ノ井、佐野を見る

篠ノ井 「さすが佐野くん、ちゃんと調べてたんじゃない」

佐野 「当たり前じゃないですか」

佐野、コピーの束を篠ノ井のデスクに置く

篠ノ井、そのコピーの多さにちよつとひく

篠ノ井 「で？」

佐野 「で？」

篠ノ井 「何だったの？」

佐野 「何がですか？」

篠ノ井 「孤独」

佐野 「・・・」

沈黙

篠ノ井 「うっそお！言おうよ、ズバつと言っちゃおうよ、せつかく調べたんじゃない」

佐野 「だって本当にわからないんですもん。それ読んでみて下さいよ、肝心なその事どこ

にも載ってないですから」

篠ノ井 「・・・」

受付に座っている職員が篠ノ井を呼ぶ

職員 「しののいさーん」

篠ノ井、そちらを見る

篠ノ井 「んあーい」

職員 「お客様がお見えになってます」

受付に立った木村が篠ノ井を見て軽く会釈をする

### ○ 市役所・会議室（五十一日目・昼）

篠ノ井と木村、長机に向かい合つて座っている

木村 「お忙しいところすみません、突然に」

篠ノ井、木村から受け取った名刺を見ている

篠ノ井 「ライターというと、雑誌かなんかの？」

木村 「まあそんなところです」

篠ノ井 「で、本日はどのようなご用件で？」

木村 「この街で孤独の発明が行われていると聞きまして」

事実としてのそれはもちろん極秘ではない

体験者を公募しているくらいだからだ

しかし篠ノ井、木村の言葉にやや構える

篠ノ井 「ああ・・・はい、いま実施中ですが」

木村 「篠ノ井さんをご担当とお聞きしましたので」

篠ノ井 「・・・」（いったい誰に？と思ったが言わない）

篠ノ井、木村に対して不審感を抱き始める

木村 「……」(視線、そうでしょ?)

篠ノ井、緊張

そして増す不審感

篠ノ井 「そうですが…何か？」

木村、薄く笑う

そんなあからさまに敵対心見せないでくれる？

木村、バックの中を探る

木村 「実は私、その孤独の発明について調べているんですが」

篠ノ井 「……」

木村、バックから写真を取り出してデスクに置く

木村 「体験者の方って、どの街でも極秘になってるんですよ」

デスクに置かれた昇平と史の写真

篠ノ井、手には取らず見つめている

篠ノ井 「……」

木村 (薄く笑う)「私、先に切り札からだしちやうの好きなんです」

問

篠ノ井 「……で、ご用件は？」

木村、デスクの写真を手にとり取って見る

篠ノ井、木村を見ている

### ○ 都会・カウンセリング室(五十一日目・昼)

橋本、デスクで書類を書いている

内線が着信

橋本、でる

助手の声 「先生、お電話です」

橋本 「誰？」

助手の声 「田中という女性の方です」

橋本 「どこの田中さん？」

助手の声 「さあちょっと……先生にご相談したい事があるとかで」

橋本 「……わかった、繋いで」

相手に繋がる

橋本 「お待たせ致しました、橋本です」

### ○ 市役所・会議室(五十一日目・昼)

電話をしている木村

木村 「そうですか……わかりました。はい……お忙しいところ失礼致しました」

木村、きる

木村 「断られました」

篠ノ井 「何で名前嘘つくんですか？」

木村 「取材依頼の電話するのこれで四回目です」

篠ノ井 「・・・」

木村 「ライターの木村、新聞社の高橋、テレビ局の林・・・で、今日は市役所の田中」

篠ノ井 「声バレてるんじゃないですか？」

木村 (笑う) 「ですね」

篠ノ井 「ですねって・・・」

木村 「だからこうやってお願いしに来たんですよ」

間

篠ノ井 「だからあ知らないって言ってるでしょ」

木村 「・・・」

木村、バックを開け封筒を取り出して篠ノ井に差し出す

篠ノ井、受け取って中を見る

札東が見える

木村 「思い出しました？」

篠ノ井 「やめて下さい」

篠ノ井、封筒を突き返す

木村 「足りない？」

篠ノ井 「お引き取り下さい」

木村 「・・・」

篠ノ井 「申し訳ないんですが、私は本当に何も知らない」

間

木村 「三ヶ月の期間終了後、体験者二人のうちのどちらかが行方不明になっています」

篠ノ井 「え？」

木村 「必ず、です」

篠ノ井 (驚き) 「どうしてっ..」

木村 「どうしてでしょうね、わかりません」

篠ノ井 「・・・」

木村 「だから、知りたいんです」

篠ノ井 「・・・」

木村 「と言うよりむしろ」

## ○ 都会・カウンセリング室(五十一日目・昼)

橋本、デスクで書類を書いている

木村の声 「孤独、って何ですか？」

ノックの音

橋本 「はい」

助手 「失礼します」

助手入る

助手 「先ほどの電話、どちらの方でしたか？」



篠ノ井 「そう？そんな男前だった？」

佐野、その言葉には取り合わず

佐野 「それ、読んでおいて下さいよ」

孤独の発明についての資料のコピー

篠ノ井 「あ、これ？ああ・・・うん、わかった」

佐野、行こうとするが

篠ノ井 「佐野くん」

佐野 「はい？」

篠ノ井 「あんまり根つけて考えない方がいいと思うよ」

佐野 「何がですか？」

篠ノ井、資料を掲げる

篠ノ井 「これ」

佐野 「・・・」

篠ノ井 「ここ（眉間）にしわ寄って、男運なくなるよ」

佐野 「余計なお世話です」

佐野、立ち去る

篠ノ井、資料に目をやる

### ○ 都会・街中（五十一日目・夕方）

電話をしている木村

真剣な表情

木村 「はい・・・ええ・・・はい・・・そうですか・・・わかりました」

電話をきる木村

### ○ 熱帯魚屋（五十九日目・昼）

水槽の中を見つめている史

店員の声 「今日はお一人ですか？」

史、振り返る

店員 「ちよつと前に旦那様といらつしやいましたよね？」

史 「あ・・・ああ、まあ・・・はい」

店員 「私がこういうのも変なんですけど・・・」

史 「？」

店員 「熱帯魚の飼育って結構大変だから、お子様が大きくなったら、その時には非」

史 「・・・」

店員 「いつでも観に来て頂いて構いませんので」

史、曖昧に微笑んでうなづく

### ○ 公園（五十九日目・昼）

平日、人気は少ない

史、ベンチに座ってぼんやりと辺りを眺めている  
手にはソフトクリームを持っている

バックからポラロイドを取り出す

史 N a 「あたしは多分、ひとりに慣れすぎていた」

片手にソフトクリームを持っているので上手く扱えない

それでも景色を撮る

史 N a 「たくさんの友達に囲まれていても、恋人に優しく抱きしめられていても、あたしは自分自身をあずける事ができなかった」

ジーン、という音と共に吐き出されるフィルム

傾いた景色、不細工な写真

それからあの日、隣にいた昇平に向けて写真を撮る

史 N a 「いつかあたしのそばからいなくなる事ばかり考えていた」

吐き出されたフィルム

昇平はいない

史 N a 「ひとりぼっちになった時、哀しくなりすぎないように」

## ○ 二人の部屋（五十四日目・夜）

リビングで食事中的昇平と史

史 「ねえ」

昇平 「ん？」

史 「孤独ってなに？」

昇平 「・・・さあ」

史 「・・・」

昇平 「・・・」

史 「本当は知ってたりする？」

昇平 「俺が？知ってる訳ないじゃん」

史 「知らないんだ」

昇平 「知らない」

間

史 「あと一ヶ月で発明しないと」

昇平 「ん？」

史 「孤独」

昇平 「え・・・ああ」

史 「しょうちゃんやっといてよ」

昇平 「なにを？」

史 「発明」

昇平 「おれ工作とか下手だから無理だわ」

史 「下手そう」

昇平 「・・・」

史 「あたしも無理」  
昇平 「わかる」

間

昇平 「延長戦だな」  
史 「え？」

昇平 「来月、引越そう」

史 「・・・」

昇平 「もう少し広いところ」

史、微笑む

### ○ 二人の部屋（六十日目・昼）

リビングに二人はいない

壁に掛けられているカレンダーに『残り30日』と書かれている  
その隣に貼られている二人の写真

### ○ 市役所・受付（六十日目・昼）

受付に立っている昇平と史

やがて奥から篠ノ井がやってくる

篠ノ井 「どうしたんですか？二人揃って」

史 （笑顔で）「入籍しにきました」

篠ノ井 「え？」

史 「結婚しようと思って」

篠ノ井 「・・・」

篠ノ井、二人の顔を見る

篠ノ井 「え・・・今？」

史 「いま」

篠ノ井 「今っていやいや、ちょっと待って下さい！」

・間

史、笑いを漏らす

史 「冗談です」

篠ノ井 「え？」

昇平 「近くまで来たから一緒に昼飯でもどうですか？」

篠ノ井 （安堵）「なんだあ、そうなんですか」

史 「それにしたってそんなに慌てなくてもいいじゃないですか」

篠ノ井 「だって、お二人の状況がまだアレですし」

史 「アレって？」

篠ノ井 「だから・・・（小声で）実施中でしょ、例の秘密のやつ」

昇平 「っていうか今更なんですけど孤独って・・・」

篠ノ井 「ああああ！」

篠ノ井、昇平を制する

昇平 「・・・」

篠ノ井 「私いまから出なきゃいけないんですよ」

史 「そうなんだ、残念」

篠ノ井 「すみません」

昇平 「いえ、突然でしたし」

篠ノ井 「近いうちにお邪魔してもいいですか？話したい事もありますし」

昇平 「はい」

○ 市役所付近・バス停（六十日目・昼）

ベンチに並んで座っている二人

史、空を仰ぐ

史 「ふわああ・・・ちよつと歩いただけですぐ疲れる」

昇平 「重い？」

史 「めちゃくちゃ重い」

昇平 「・・・」

昇平、史のお腹を見ている

史、空を見たまま

史 「これ、人の子供」

昇平、史の横顔を見る

史 「あたしを捨てた男の子供だよ」

昇平 「・・・」

史 「あたしは、父親に捨てられて母親に見捨てられた」

昇平 「・・・だからなに？」

史 「優しさと同情であたしといってくれるなら、しょうちゃんはこの先ずっとその重さを背負ってく事になるんだよ」

沈黙

昇平 「あ・・・くまだ」

くまのきぐるみが歩いている

史、見る

史 「ホントだ」

昇平 「こっち来る」

くまがてくてくと歩いてきて史の隣に座る

それからおもむろに頭を取る

くま 「あっちい・・・」

手でパタパタと扇ぐ

二人 「・・・」

くま、二人の視線を感じて見る

くま 「どうも」

二人、会釈

史 「どこ行くんですか？」

くま 「デパート」

史 「へえ」

くま 「客集まるからこれ着たまま歩いて来いって言うんですよ……ひでえよな」

史、笑いを漏らす

昇平、不意に史のお腹に話しかける

昇平 「ほーら、くまさんだぞー」

史 (驚き)「……」

昇平 (くまに向かって)「ちよつとそれかぶつてくんない？」

くま 「ああ……はい」

くま、かぶる

昇平 「で、踊って」

くま 「は？」

昇平 「早く踊る」

くま、変な動き

昇平 「ほーら見てみー、変なくまがいるぞー」

史、笑う

史 「しょうちゃん」

昇平 「ん？」

史 「一緒に死のうか」

昇平 「……」

くまは踊り続けている

昇平 「いいよ」

史 「……」

昇平 「いいけど」

史 「……」

昇平 「とりあえず一緒に生きてみようよ」

くま 「もういいっすかあ？」

史、昇平を見つめている

史Na 「愛しさがふくらんでいく程、失うのが恐くなる」

昇平、史にキス

史Na 「ごめんねしょうちゃん、もうこれ以上耐えられそうにないや」

### ○ 都会・カウンセリング室(六十日目・夕方)

デスクに向かって書きものをしている橋本

ドアが開き篠ノ井の姿

篠ノ井 「失礼します」

橋本 「ああ、すいません、すぐ終わりますので」

篠ノ井 「いえ、お気になさらずに」

篠ノ井、手近な椅子に座る

緩やかな音楽が室内に満ちている

橋本が走らせる万年筆の音が微かに聞こえる

どこからか誰かの声が聞こえてくる

関係のない音達が混ざり合う不規則なリズムが規則的に聞こえてくる

篠ノ井 「孤独って何なんですか？」

橋本 「……」

篠ノ井 「……」

橋本 「何か、怒ってらっしゃいますか？」

篠ノ井 「……どうしてですか？」

橋本 「声のトーンが」

篠ノ井 「……」

橋本 「人間の感情って、表情よりも声の方が正確に出るものなんですよ」

沈黙

橋本の万年筆の音が止まる

橋本 「孤独は感情です」

篠ノ井 「……」

橋本 「嬉しさや哀しさ怒りと同様、それが何か？と問われても完璧な答えをだす事はできません」

篠ノ井 「なるほど」

橋本 「感情は目に見えませんし、表現の仕方は人それぞれでしょう」

篠ノ井 「でも、あなたが発明したんですよね？」

篠ノ井、上着のポケットに手を入れて盗聴器のスイッチを確かめる

橋本、篠ノ井を向く

橋本 「建前はそうなっていますが、私は定義づけただけです」

篠ノ井 「……」

橋本 「誰もが嬉しさや哀しさを感じるように……」

## ○ 都会・病院中庭（六十日目・夕方）

木村、ベンチに座っている

耳にしているイヤフォンからの声を聞いている

医の声 「私たち誰もがそれを感じる能力を持っています」

篠ノ井 「それ？」

医の声 「私は元から存在していたそれに『孤独』という名前をつけただけです」

篠ノ井 「ですから、その孤独が何なのか知りたいんです」

医の声 （笑いを漏らす）「堂々巡りですね」

篠ノ井 「何がですか？」

医の声 「ニワトリが先か卵が先か、そんな話ですよ」  
篠の声 「はぐらかさないで下さい」

間

医の声 「何をそんなに焦っているんですか？」

間

篠の声 「妙な噂を聞きました」

木村、篠ノ井の発言に反応

篠の声 「発明の体験者が行方不明になるという話です」

医の声 「聞いた事ありませんね」

篠の声 「事実です」

医の声 「篠ノ井さん、さっき噂っておっしゃったじゃないですか」

篠の声 「自分でもまだ信じきれないんです」

間

篠の声 「それが発明の結果なんですか？」

看護婦 「どうなさいました？」

木村、突然の声に驚いてとっさにイヤフォンを外す

看護婦、木村の顔を覗きこんでいる

看護婦 「具合でも？」

木村 「あ……いえ、別に……大丈夫です」

看護婦 「そうですか、何かうずくまっていますように見えたもので」

木村 「いえ、何でもありません」

看護婦 「もし何かありましたらいつでも、ここ病院ですから」

木村 「ああ……はい」

看護婦 「面会か何か？」

木村 「え……ええ」

看護婦 「一般の方は十七時までですので、まだお済みでないようだし……」

木村 (遮り) 「大丈夫です、もう済みました、もう帰るところです」

看護婦 「そうですか、じゃあ」

看護婦、去る

木村、その後ろ姿を目で追い、頃合いを見計らってイヤフォンをつける

篠の声 「すいませんでした、お忙しいところ」

医の声 「いえいえ、わざわざ遠方からご苦労様です」

篠の声 「失礼します」

ドアの開く音

衣擦れの音

木村、軽いため息をついてイヤフォンを外す

それから携帯電話を取り出してかける

木村 「もしもし……はい……三十分後にさっきのことで」

電話をきる

○ 都会・喫茶店（六十日目・夕方）

テーブル席に向かい合って座っている篠ノ井と木村

木村 「突っ込みすぎでしたね」

篠ノ井 「申し訳ない」

木村 「途中で邪魔が入ってしまったって、部屋を出る間際の会話を聞き逃しました」

篠ノ井 「邪魔って？」

木村 「大丈夫です・・・それよりどんな？」

・間

篠ノ井 「結局、行方不明になるという事実を確認する事はできませんでした」

木村 「・・・」

○ 都会・カウンセリング室・数十分前の回想（六十日目・夕方）

橋本 「何か、我々の事を犯罪組織かなにかと疑ってらっしゃいますか？」

篠ノ井 「いえ、そういう訳では・・・」

橋本 「結論から申し上げますと、今ここでこれ以上お話しする事はできません」

篠ノ井 「どうして？」

橋本 「被験者にあまり感情移入しない方がいい」

篠ノ井 「・・・」

・沈黙

橋本 「それに、今更あなたがどうこうしたところで、もうなるようにしかありませんよ」

篠ノ井 「・・・それでも知りたい、と言ったら？」

橋本 「そう遠くないうちにお話しできると思います」

篠ノ井 「・・・わかりました」

橋本 「また近いうちに、今度はこちらからご連絡しますので」

篠ノ井 「二人はどうなるんですか？」

橋本 「それは二人が決める事です」

篠ノ井 「・・・」

○ 二人の部屋（六十三日目・昼）

ストロボのフラッシュ

史、自分にカメラを向けて写真を撮った

吐き出された写真

○ 二人の部屋・玄関外（六十三日目・昼）

史、ドアを閉める

それから鍵を閉めようかどうか迷う

結局閉める

そして去る

○ 二人の部屋（六十三日目・昼）

がらんとした部屋

史Na 「たった二ヶ月だったけど、しょうちゃんと一緒に過ごした時間はあたしが今まで生きてきた中で一番幸せな時間でした」

○ バス車内・市役所へ続く坂道（六十三日目・昼）

史、座席に座って車窓からの景色を眺めている

泣き出す

史 「泣くな・・・自分で決めたんじゃよ」

○ 市役所付近・バス停（六十三日目・昼）

バスが停車する

史Na 「でもいつかもしかしたら、しょうちゃんがいなくなっちゃうかもしれない事を想像すると、恐くて恐くてもうこれ以上耐えられない」

史、バスから下りて来る

○ 市役所・受付（六十三日目・朝）

受付に立っている史

史Na 「もう十分、一生分の幸せをもらいました。この先にながあっても、あたしはその思い出だけで頑張れます。だから・・・」

篠ノ井が小走りにやってくる

篠ノ井 「どうしたんですか？」

史 「あたし、やめようと思って」

篠ノ井 「え？」

○ 二人の部屋・数時間前（六十三日目・朝）

史、写真の裏にメッセージを書いている

不意に笑いを漏らす

史 「しまった・・・書ききれない」

史、写真を表に返して文字を書く

史Na 「あなたに会えて良かった」

○ 市役所・会議室（六十三日目・昼）

史と篠ノ井と、長机に向かい合って座っている

篠ノ井 「どうしてやめるんですか？」

史 「これ以上一緒にいたら、ひとりになるのが耐えられなくなっちゃうと思って」

篠ノ井 「・・・」

史 「好きになればなる程、離れるのが恐くなる」

篠ノ井 「ずっと一緒にいればいいじゃないですか」

史 「あと一ヶ月で終わりですよ？」

篠ノ井 「二人の時間はその後も続きます」

史 「……」

篠ノ井 「これが終わっても、それからずっと二人で一緒にいればいいじゃないですか」

史 「ずっと、って永遠って事ですよね」

篠ノ井 「……」

史 「永遠なんてあるんですか？」

篠ノ井 「信じなければ叶わないでしょ？」

史 「……そうですね……そうかもしれないです」

篠ノ井 (微笑む) 「帰りましょ、野中さんいないと吉川さんまた慌てちゃいますよ」

史 「あたしがあたしじゃなかったら、もっと長くしようちゃんといたかった」

篠ノ井 「あなたがあなたじゃなかったら、吉川さんは吉川さんじゃない」

史、笑いを漏らす

史 「変なの」

篠ノ井 「……変じゃないですよ」

・沈黙

史 「孤独ってなんだったんですか？」

篠ノ井 「……」

史 「しようちゃんと一緒にみたかったけど」

篠ノ井 「……」

史、頭を下げる

史 「ごめんなさい、上手く発明できませんでした」

### ○ 二人の部屋・玄関外(六十三日目・夜)

昇平、ドアノブを回して引く

開かない

### ○ 二人の部屋(六十三日目・夜)

ドアが開き昇平の姿

慌てた様子でリビングへ

昇平 「史！」

いつもと違う、史がいない気配を感じる

一通り探す

カレンダーの横に貼られている写真に気付く

昇平、写真をはがす

裏に書かれているメッセージに気付く

メッセージを読み終えて表面に返す

史の笑顔の写真『あなたに会えて良かった』

昇平、玄関へ駆け出す

○ 史の自宅（六十三日目・夜）

ドアが開き、史の姿

室内に入る

電話が着信

昇平からの電話

史 「……」

見つめたまま、でない

○ 二人の部屋・玄関外（六十三日目・夜）

昇平、繋がらなかった電話をきる

○ ファミレス前（六十三日目・夜）

昇平、史を探している

○ 都会・カウンセリング室（六十三日目・夜）

デスクの上の電話が鳴る

橋本、受話器をとる

橋本 「はい……わかった、繋いで……もしもし……ええ大丈夫です……はい……

はい……わかりました……明日お時間とれますか？……ではこちらにお連れして

頂いてもよろしいでしょうか？……ええ……お一人で……いえ、知らせないで

下さい……はい……では明日」

橋本、受話器をおく

○ 二人の部屋・玄関外（六十三日目・夜）

昇平、帰宅

ドアを開けて部屋へ

○ 二人の部屋（六十三日目・夜）

電気が点きっぱなしの部屋

昇平 「史」

返事はない

昇平、室内へ

昇平 「史」

返事はない

○ 史の自宅（六十三日目・夜）

史、部屋に一人

○ 市役所・受付（六十四日目・昼）

受付に立っている昇平

佐野の声「あのお」

昇平、向く

佐野 「やっぱり、吉川さん……ですよね？」

昇平 「……はい」

佐野 「私……写真を取りに伺っておりますました佐野です」

昇平 「ああ……どうも」

佐野 「はじめまして」

昇平、会釈

佐野 「篠ノ井さん……ですか？」

昇平 「はい」

佐野 「朝からでておりました、戻りは夜になるかと」

昇平 「そうですか」

佐野 「……あの」

昇平 「……」

佐野 「史は……どこにいるか知ってますか？」

昇平 「……」

佐野 「……」

○ 都会・病院廊下（六十四日目・昼）

カウンセリング室の前、長椅子に座っている史と篠ノ井

篠ノ井 「はっきり言ってこのまま何もなかった事になんかできないと思いますよ」

史 「……」

篠ノ井 「私だって、吉川さんに隠し通す自信なんか全くない」

史、うつむく

篠ノ井 「帰ったら会ってちゃんと話して下さい」

史、篠ノ井を見る

篠ノ井 「あなたもうひとりじゃないんですから」

史 「……」

カウンセリング室のドアが開いた

看護婦 「野中さん、どうぞ」

史、見る

立ち上がり室内へ

篠ノ井、史が室内に入るのを見届ける

ポケットから携帯電話を取り出してかける

繋がる

篠ノ井 「いま入りました」

○ 都会・病院中庭(六十四日目・昼)

木村、ベンチに座っている  
イヤフォンを耳につける

○ 都会・カウンセリング室(六十四日目・昼)

デスクについている橋本

史、それに向き合って座っている

橋本 「リタイヤするとお聞きしました」

橋本、穏やかな口調

史 「はい・・・すみません」

橋本 「いえ、お気になさらないで」

問

橋本 「あなた方お二人を選んだのは私ですから」

史 「え？」

○ 二人の街の駅(六十四日目・昼)

昇平、ホームで電車を待っている

医の声 「私があなたと吉川昇平さんを選びました」

○ 都会・病院中庭(六十四日目・昼)

木村、ベンチに座って声を聞いている

史の声 「じゃああの面接は？」

医の声 「あまり関係ないです」

史の声 「そう・・・なんですか」

医の声 「あなたがリタイヤする事も予想はできてました」

史の声 「・・・どうして？」

医の声 「あなたがあなたで吉川さんが吉川さんだからです」

○ 電車内(六十四日目・昼)

昇平、座席に座っている

医の声 「あなたは過去の経験から自分に強い負い目を感じている、だから自分は彼の重荷にしかならない・・・想いが強くなる程、裏切られる事に怯えてた」

○ 都会・カウンセリング室(六十四日目・昼)

史、うつむいている

橋本 「もう傷つきたくないという気持ちがどんどんふくれあがって」

史 「・・・」

橋本 「彼の優しさから逃げた」

史 「・・・違います」

橋本 「捨てられる前に捨てた、という事でしょう」

史 「違う！」

○ 都会・病院廊下（六十四日目・昼）

カウンセリング室から史の声が聞こえた

篠ノ井、カウンセリング室の方を見る

○ 都会・カウンセリング室（六十四日目・昼）

史 「あたしといたらしようちゃんはいつかきつと後悔する」

橋本 「・・・」

史 「あたしはしようちゃんに幸せになって欲しい」

橋本 「それであなたは？」

史 「あたしは・・・」

史、笑う

史 「ひとりで大丈夫です」

間

橋本 「あなたはもうずっと孤独だった」

史 「え？」

橋本 「せめて今までの事は全部忘れたらいい」

○ 都会・病院中庭（六十四日目・昼）

子供 「おねーちゃん」

木村、突然の声にはっとする

シャボン玉があたりに浮遊している

子供 「見て見て」

子供がシャボン玉を吹いた

木村、思わず軌跡を目で追う

振り返ると異様な光景に気付いた

十数人の看護婦が無表情に木村を見下ろしている

木村 「・・・」

木村、完璧な恐怖に囚われる

医の声 「あなたも幸せになるべきです」

イヤフォンから声が聞こえた

○ 都会・カウンセリング室（六十四日目・夕方）

ガタン、と勢いよくドアが開いた

デスクに向かっている橋本

橋本 「ノックを」

昇平の姿

昇平 「あ……すいません」

橋本、見る

橋本 「吉川さん……ですか？」

昇平 「はい」

橋本 「……」

昇平 「史は？」

間

橋本 「先ほど帰られました」

昇平 「どこに？」

橋本 「さあ、私にはちよつと」

昇平、ままならないこの状況に苛立ち始める

昇平 「俺は……俺と史は何をしてるんですか？」

橋本 「それを聞きに来たんですか？」

昇平 「史を探しに」

橋本 「どっちですか？」

昇平 「どっちもだよ！」

沈黙

橋本 「お二人は『孤独の発明』をしています、そしてもうあなたは彼女と会えない」

昇平 「どうして？」

橋本 「彼女がもう会わないと決めたからです」

昇平 「……なんで」

橋本 「どちらにしても残り三週間の実施期間が終了すれば、あなたと彼女は元の生活に戻ります。規定の期間が少し早まっただけです」

昇平 「期間とかそういうのって、そっちが勝手に決めた事でしょ？」

橋本 「もちろんそうです」

昇平 「そんな関係ない」

橋本 「会わないと決めたのは彼女です」

昇平 「……」

橋本 「それは私達ではなくむしろあなた方の問題です」

昇平

沈黙

昇平 「孤独って何なんですか？」

橋本 「感情です、目には見えない」

昇平、薄く笑う

昇平 「そんなの……どうやって発明しろって言うんだよ」

橋本 「あなたはもうそれに足を踏み入れている」

昇平 「……」

橋本、デスクに置かれているICレコーダーを昇平に渡す

橋本 「そこに野中さんとの会話が入っています」

昇平 「……」

橋本 「期間はまだ終わってませんので、ゆっくり考えて下さい」  
昇平 「……」

○ 二人の部屋・玄関外（六十四日目・夜）

昇平、帰宅

ドアを開ける

ガタン

鍵がかかっていた

昇平 「……」

ためらい、部屋には入らずに引き返す

○ 路上（六十四日目・夜）

昇平、ぼんやりと歩いている

○ ファミレス（六十四日目・夜）

昇平、テーブル席に座りぼんやり

テーブルの上には受け取ったICレコーダーが置かれている

昇平、手に取る

しばらく見つめてからイヤフォンを耳に

再生

音が聞こえる

医の声 「リタイヤするとお聞きしました」

史の声 「はい……すいません」

医の声 「いえ、お気になさらないで……あなた方お二人を選んだのは私ですから」

史の声 「え？」

医の声 「私があなたと吉川昇平さんを選びました」

史の声 「じゃああの面接は？」

医の声 「あまり関係ないです」

史の声 「そう……なんですか」

医の声 「あなたがリタイヤする事も予想はできてました」

史の声 「……どうして？」

医の声 「あなたがあなたで吉川さんが吉川さんだからです……あなたは過去の経験から自分に強い負い目を感じている、だから自分は彼の重荷にしかならない……想いが強くなる程、裏切られる事に怯えてた……もう傷つきたくないという気持ちがどんどんふくれあがつて……彼の優しさから逃げた」

史の声 「……違います」

医の声 「捨てられる前に捨てた、という事で」

昇平、とっさに停止ボタンを押す

昇平 「……」

○ 二人の部屋（六十四日目・真夜中）

鍵の開く音

ドアが開く

電気が点き昇平の姿

昇平Na「不思議で仕方なかった」

○ 二人の部屋・リビング（六十四日目・真夜中）

テーブルに置かれている最後の史の写真

昇平Na「たった二ヶ月だったのに」

昇平、それを手に取る

昇平Na「ひとりの夜が思い出せない」

○ 大学のテラス（六十五日目・昼）

昇平、ベンチに座りパンを齧っている

石田、昇平に歩み寄る

石田「あれ、愛妻弁当は？」

昇平「……」

石田「ケンカでもしたの？」

昇平「いや……」

沈黙

昇平「おととい、あいつ出てった」

石田（驚き）「どいへん？」

昇平「……」

石田「また連絡とれないの？」

昇平「……」

石田「何で一緒に暮らしてたか知らないけど」

昇平「……」

石田「カッコつけてると後でめっちゃ後悔するよ」

昇平「……」

○ 昇平の大学・屋上（六十五日目・昼）

昇平、ベンチに座っている

手に持っているICレコーダー

昇平「……」

意を決してイヤフォンをつける

再生

医の声「……でしょう？」

史の声「違う！……あたしといたらしようちゃんはいつかきつと後悔する……あたしは

しょうちゃんに幸せになって欲しい」  
医の声 「それであなたは？」

史の声 「あたしは・・・ひとりで大丈夫です」

沈黙

医の声 「あなたはもうずっと孤独だった」

史の声 「え？」

医の声 「せめて今までの事は全部忘れたらいい・・・あなたも幸せになるべきです」

沈黙

医の声 「記憶を消しましょう」

史の声 「え？」

昇平 「え？」

医の声 「あなたがあなたである限り、過去の傷を背負ったまま幸せになる事から逃げ続けてしまう・・・だから、孤独というその傷を消しましょう」

史の声 「そんな事できるんですか？」

医の声 「できますよ」

昇平 「嘘だろ・・・」

医の声 「初めから決まっています。それが、お二人が過ごした三ヶ月間の結果です」

昇平 「・・・」

最後まで聞き終えた昇平が立ち上がる

### ○ 昇平の大学（六十五日目・昼）

石田、昇平に歩み寄る

石田 「電話は？」

昇平 「ああ、した」

石田 「仲直りは？」

昇平、曖昧にうなづく

石田 「やればできるじゃん」

昇平、笑いを漏らす

史の声 「じゃあ、しょうちゃんの事は？」

### ○ 公園（六十八日目・昼）

昇平、ぼんやりとベンチに座ってコーヒーを飲んでいる

史の声 「忘れちゃうんですか？」

医の声 「はい」

史の声 「それは・・・嫌です」

医の声 「あなたはもう彼と会わないと決めた、それなら忘れた方がいい」

### ○ 熱帯魚屋（七十日目・昼）

史、店前を通りかかり立ち止まる

史の声 「嫌です」

医の声 「彼の事を愛してるから？」

史の声 「・・・はい」

史、歩き出す

### ○ 二人の部屋（七十三日目・夜）

昇平、ポラロイドを手に取る

医の声 「じゃあどうして二人で生きようとしませんですか？」

撮る

### ○ 二人の部屋・玄関前（七十七日目・朝）

佐野、ポストを開けて写真を取り出す

誰も写っていない室内の写真に日付だけが書かれている

史の声 「だからそれはあたしが・・・」

### ○ 史の自宅（八十一日目・昼）

史、ベランダで洗濯物を干している

医の声 （遮り）「あなたのせいじゃない、あなたの過去のせいだ」

史の声 「そんなの・・・そうじゃない」

医の声 「彼ならおそらく今のままのあなたを受け入れてくれるでしょう・・・でもあなたが

それを望んでいないのなら、あなたはもうあなたでい続ける意味はない」

### ○ 昇平の大学・屋上（八十九日目・昼）

昇平、ひとり

医の声 「もういい加減、幸せになる事を選んだ方がいい。吉川さんもそれを望んでると

思いますよ」

昇平、携帯を取り出してかける

コール音

繋がる

昇平の声 「もしもし、吉川です・・・はい・・・史に伝えてもらえますか・・・俺も、あなたに

会えて良かったって・・・はい、よろしくお願いします」

### ○ 都会・病院中庭（八十九日目・昼）

ベンチに座っている篠ノ井

電話をきる

篠ノ井 「吉川さんから伝言です」

篠ノ井、隣に座っている史を見る

篠ノ井 「あなたに会えて良かった」

シャボン玉があたりに浮遊している

史 「はい」

史、シャボン玉を見透かす  
狂ったみたいな空の青さで泣きたくないのに涙が滲んだ

### ○ 二人の部屋・玄関（八十九日目・夕方）

昇平、やってきた時と同じバックを持っている  
この部屋を去る

昇平 N a 「俺もいつか忘れる事ができるだろうか」

ドアを開けて玄関を出る

昇平 N a 「この鍵がいつも開いていて、その先にあなたがいた事を」

ドアを閉める

昇平 「史、おやすみ」

鍵を回し施錠

### ○ 昇平の自宅（五年後・朝）

テレビ 「○○地区にて実施中だった『孤独の発明』三ヶ月の期間が本日をもって終了となりました」

昇平、出掛ける支度をしている

テレビ 「結果は見事、成功となりました」

昇平、テレビを見る

テレビ 「孤独という新しい風が吹き、益々の地域発展と市民全員の幸せを市長が声高らかに宣言しました。それでは、その模様を今から・・・」

昇平、テレビを消して家を出る

### ○ 昇平の故郷・墓地へ続く階段下

箒で道を掃いている若い坊主

昇平、軽く会釈してその脇を通り過ぎる  
それから思い出して立ち止まり振り返る

昇平 「ねえ、もしかして・・・」

ギターの真似

昇平 「この息子さん？」

若坊主 「ああ、そうです」

箒でギターの真似

若坊主 （笑う）「今でもやっていますよ」

昇平 「その頭で？」

若坊主 「ロックはここっすよ」

指を胸に

昇平、笑う

その時、子供が二人の脇を走り抜けて階段を駆け上がっていく

二人、見る

若坊主 「おおい！落っこちんなよ！」

昇平、若坊主に軽く会釈して階段を上がって行く

### ○ 昇平の故郷・墓地

昇平、姉の墓へ向かっている

前方に先ほどの子供がいる

子供、昇平に気付く

子供 「ねえ、パパのどれ？」

昇平 「……」

子供、昇平に歩み寄る

子供 「どれ？」

昇平、困って辺りを見回す

親らしき姿は見当たらない

昇平 「どれって言われてもなあ……」

### ○ 昇平の故郷・墓地へ続く階段下

箒で道を掃いている若い坊主

史、小走りで駆け寄る

史 「男の子いませんでした？」

若坊主 「ああ、さっき走ってった」

若坊主、階段を指す

史 「ったくもう……」

史、階段を駆け上がっていく

若坊主 「おおい！落っこちんなよ！」

### ○ 昇平の故郷・墓地

昇平、子供と一緒に歩いている

昇平 「名前は？」

子供 「しょうへい」

昇平 「え？」

子供 「5歳」

昇平 「あ……そうじゃなくて苗字は……」

史の声 「しょーちゃん！」

昇平と子供、振り返る

昇平 「……」

史の姿

子供 「ねえ、パパのどれえ？」

史、駆け寄る

昇平 「……」

史、屈んで子供に話しかける

史 「ちょっとしようちゃん、走らないでよ」

子供 「だって史、遅いんだもん」

昇平 「……」

史、立ち上がり昇平を見る

史 「すみません」

昇平 「あ……別に」

史、子供の手を引いて歩き出す

昇平、呆然とその後ろ姿を見つめている

そして二人、墓前で立ち止まる

昇平、笑いを漏らす

昇平 (独り言) 「それ、俺のねーちゃんのじゃねえか」

昇平、墓前に向かって歩き出す

墓前の史と子供

昇平、その隣で立ち止まる

昇平 「吉川さん……ですか？」

史 「あ……はい」

昇平 「俺もいいですか？」

昇平、手に持っていた花を供える

史 「……」

昇平 「ご主人と、以前少し」

史 「そうですか」

子供 「パパの事、知ってるの？」

昇平 「ちよっとね」

子供 「いいなあ」

史 「この子が生まれるほんの直前だったから」

昇平 「……」

史 「思わず同じ名前つけちゃいました」

昇平 「……」

史、笑う

史 「だから呼びやすくて」

昇平、子供を見る

昇平 「しょうへい」

子供 「なに？」

昇平 「史の事、ひとりにすんなよ」

子供、きょとん

史 「……」

昇平、墓前に手を合わせて目を閉じる

昇平 N a 「ねえ史、憶えてる？」

史、昇平を見ている

昇平 N a 「二人で過ごした孤独の事を」

END